

系統色名区分からみた慣用色名分布の特徴

Characteristics of Distribution of Traditional Color Names in Six Color Dictionaries

近江源太郎

Gentarow Ohmi

女子美術大学

Joshibi University of Art and Design

浅井茂登子

Motoko Asai

女子美術大学美術研究科

Graduate School of Joshibi University of Art and Design

中平多絵子

Taeko Nakahira

女子美術大学美術研究科

Graduate School of Joshibi University of Art and Design

キーワード：色名、色名辞典、ISCC-NBS 色名法

keywords : color names, dictionary of color names, ISCC-NBS color names

1. はじめに

色名は、いうまでもなく色を表示するためのもっとも一般的な方法である。しかし、とりわけ伝統色名あるいは慣用色名と称される色名は、単なる表示記号としての意味以外に、さまざまな要因が関与して形成される。たとえば図1は、Maerz and Paul の色名辞典に収録されている約 4500 の色名を、同書記載の成立年代にしたがって集計した結果である¹⁾。時代とともに新色名の誕生数が増加している様、とりわけ人造染料の発明以降新色名が急増している様がうかがえる。色名は、このように一方では技術革新やそれにとまなう色域の拡大によって規定されるであろう。けれども、他方では Berlin and Kay の指摘した基本色彩語彙のように、人類普遍のそしておそらく脳神経科学的な支配のもとに、形成される色カテゴリーの側面もある。そして、この両者の間にあって、文化的・言語的な影響のもとに、多数の色名が誕生し、普及してきたといつてよい。

そこで、本研究では、6 点の色名集をとりあげて、それらの間での色名分布の異同を考察した。

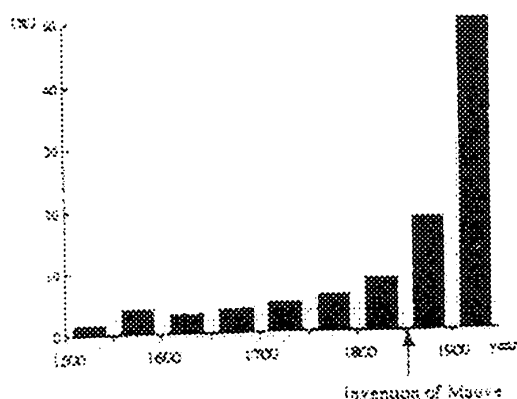


図1 Maerz and Paul における新色名の発生率(%)

2. 資料と方法

2-1 対象資料

1) Maerz, A. and Paul, M. Rea. A Dictionary of Color.

(1930) <4583 語>

2) Ridgway, R. Color Standards and Color Nomenclature. (1912) <1643 語>

3) 長崎 盛輝 日本の伝統色 京都書院 (1996) <225 語>

4) 天野 節 色名総覧 錦光出版 (1980) <516 語>

5) JIS Z 8102-2001 物体色の色名 <慣用色名のうち「金」「銀」を除く和色名 145 語>

6) 湊 幸衛 (監) 中国色名総覧 カラープランニングセンター (1979) <632 語>

2-2 分析方法

上記6資料収録の色名を、いわゆる ISCC-NBS 系統色名法²⁾の合計 267 分類によって集計した。なお、上記資料1) および資料2) は、引用文献2) に色名が分類収録されているので、その頻度を集計した。資料3) ~ 資料6) は、それぞれに記載されているマンセル記号によって分類した。この系統色名法では、基本的には color names と modifiers とのマトリックスによって、マンセル色立体を 267 分割しているが、ここでは便宜的に前者を色相、後者をトーンと称することにする。以下では、色名集ごとに色相・トーン別に頻度を集計したデータを取りあげる。ただ、その場合、全色名集とも出現率 2.0% 未満 (殆どは 1% 未満) のカテゴリーは隣接するカテゴリーに含めた。

3. 結果と考察

以下、色相ごととトーンごとに色名数を集計した結果を中心に述べる。

3-1 色名集間関係

トーンごとの色名出現率について、色名集間の相関関係を求めると、殆どが 0.8 以上であり、もっとも係数の低い JIS と Ridgway 間でも 0.69 である。色相については表1に示したように、最高で、.79、最低は、.39 である。ちなみに、因子分析を行ってみると、回転前の第1因子の寄与率は、トーンの場合 .88、色相では .66 であり、いずれも第2因子の固有値は 1.0 を下廻っている。した

表1 色名集間での色名出現率の相関（色相）及びノーネームカテゴリー率

	M&P	Ridgway	JIS	伝統色名	色名総覧	中国色名
M&P	1.00					
Ridgway	.39	1.00				
JIS	.65	.52	1.00			
伝統色名	.71	.48	.73	1.00		
色名総覧	.72	.70	.77	.79	1.00	
中国色名	.50	.55	.51	.70	.73	1.00
色名数	4583	1643	145	225	516	632
ノーネームカテゴリー率	18.4	19.1	52.4	42.7	22.1	33.7

がって、色立体内での色名の出現傾向には、巨視的にみれば言語や文化の差を超えた共通性があるといえそうである。しかし、あえて文化なり色名集なりに固有の特徴を求めれば、トーンよりも色相に現れやすい、とみられる。

3-2 色名分布の特徴

トーンごとの出現率をみると、moderate, light の2トーンが高く、併せると30%を超える（最高38.14%、最低31.74%）。さらにこれにgrayish トーンを加えると51.63%~41.67%を占めている。つまり、色名は中明度で中彩度以下の色域において密である、といえる。こうした現象をもたらした背景のひとつとしては、多くのいわゆる伝統色名が誕生した時代には人工的に発色される色域が狭く、今日からみれば中彩度の色が多かった点があげられるのではなからうか。いまひとつの背景としては、高彩度色の場合、赤、黄、緑……といったいわゆる基本色名の一般性が高く、この色域には多様な色名を必要としなかったとも推測される。

なお、各色名集ごとに、267 カテゴリー中色名が存在しないカテゴリー数を求めると、表1に併記したとおりである。今回の調査では、収録色名数が比較的多い色名集をとりあげたわけであるが、それでもこのようにノー・ネーム・ランドがかなり存在している事実は、慣用される色名による色彩表示の限界をうかがわせる。

3-3 各色名集の特徴

(1) Maerz and Paul と Ridgway。色相別の色名出現率では、両者の相関係数は、.39 と今回の分析中もっとも低い値である。その原因は、Maerz and Paul が Brown や Red 系など暖色系を多く収録しているのに対して、Ridgway が Blue, Violet, Purpleなどを多く収録している点にある。同じ英語圏でありながら、このようになり大きい差がみられる点は、色名集の個性というべきであろう。今回とりあげた6色名集のうちでは、Ridgway がむしろ異質である。

(2) 伝統色名と色名総覧。相対的にみれば色名総覧が Blue~Purple~Pink~Red 系を多く収録しているのに対して、伝統色名は Brown, reddish Orange を多く収録している。また伝統色名が light, moderate, grayish など中明度低彩度に比重があるのにくらべて、色名総覧は vivid, strong, deep, pale が多い。

(3) JIS。他の色名集にくらべて、vivid, strong, deep の採用率が高く、grayish の採用率が低い。JIS は2001年に見直され、色名数も増加している。あるいは、現代の高彩度化の反映であるかも知れない。また、個々の色名にマンセル記号をあてはめる段階での見解の特徴が影響している可能性についても検討すべきかも知れない。

(4) 中国色名総覧。他の色名集にくらべて、Pink 系および Green 系、White, Gray 系が多く、Brown 系が少ない。トーンでは、brilliant, light など明るいトーンが多く、moderate, dark, dark grayish など暗いトーンが少ない。

4. まとめ

6種類の比較的収録色名数の多い色名集における色名分布の特徴を、ISCC-NBS 系統色名によって比較した。その結果、色名の出現傾向には日・英・中の言語・文化差を超えた、かなり高い共通性が認められた。特にトーン別の出現傾向は、高い一致度を示した。色のコード化あるいはカテゴリー化には、文化差を超えた普遍性があるようである。ただ詳細に比較すると、文化あるいは色名集による差異は、トーンよりも色相に現れる。

引用文献

- 1) 近江源太郎・李相明・菅原奈美 Maerz and Paul "Dictionary of Color" 収録色名の成立年代別集計（未発表）
- 2) Kelly, K.L. and Judd, D.B. Color—Universal Language and Dictionary of Names. NBS special publication 440. (1976)